
手紙 -ラブレター-

蒼愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙 -ラブレター-

【Zマーク】

Z7530Z

【作者名】

蒼愛

【あらすじ】
ありがとう。

私に、一通の手紙を残してくれて。

大好きだよ、今でも。

Story? Prologue ·

君は、一通の手紙を私に残して

天国に逝つてしまつた

中3の冬

その時私は、三橋彩には大好きな人大切な人が居た。

三上陽

1つ上のお兄さん的存在の”幼馴染み“。周りから見ると私の事は「片思いをしている女」と思っているだろう。

たか それは正解だ

私は陽兄に片思い、一方的に恋をしている。

実を言ひ、この恋は叶わないと自分でも思つてゐる。

うから
決めつけだが、
陽兄は私の事を「恋愛対象外」だと思っていると思

”幼馴染み“はもう1人いる。

三浦 圭太。

私と同じ年の男の子。

私たち3人はたまたま近所で「三」と文字が名前についている」とから仲良くなつた。

時々、からかわれるときもある。

でもそんなときはいつも陽兄が助けてくれた。その姿は、逞しくかつこよくキラキラして。

そういうところを見て惚れたのだ。

多分、私の立場に誰かが入つたらその人も陽兄に惚れるだろう。

陽兄は外見も内面もかつこいい。

顔のパーツも揃つていて、モテるだろう。

圭太もモテる。

そんな2人に囲まれて育つた私は、よく一定の質問をされる。

「彩つてどっち派？！陽君？圭太？！」

「どっちと付き合つてるの？！」

など。。。

正直言つてそういうの迷惑。

疲れる。

でも、時折嬉しく思うときもある。

「陽君と付き合つてるの？！」

「彩いいなあ～、あんなかつこいい人と付き合つてるなんて。」とか。

陽兄との事を言わると、すぐくうれしい。

それは、私がただ思つてゐるだけ。でもいいの。

陽兄と一緒にいるだけで幸せ。

そう思っていたの。

Story?Prototype. (後書き)

どうも！

蒼愛です(、？？、)

しろ - との作品を読んでいただき有り難う御座いますmm*
週01のペ - スで更新するかもですが、宜しくお願ひします！

(、・・、)

From . Ao

Story? 知ってるよ、そんな事。

12月24日

一
陽兄！彩！

「あのさ、俺ステージ立てることになった！」
あまりにもいきなりすぎて動搖してる私と陽兄。

そんな中、気持ちを入れ替えたのか。

「すげえじゃん！圭太！」

陽兄君だよ

圭太は昔からライブのステージに立てるのを夢にし毎日家でエレキの練習をしてた。

夢か叶って良かたね。 美太
でも、これが壊れてゆく。

「で、それいつだ？」

陽兄がワクワクして圭太に問う。

「それが、明日なんだよなー。来れるか?」

急だなあ
・・・。

陽兄は行くのかな？

「馬路か！俺、絶対行くわ！」

約5秒程で答えた陽兄。

「馬路で？！サンキュー…彩は来るか？？」

陽兄、居るもんね。

「もちろんっ！圭太の初ライブだよ？…あつたりまえじゃん！」「私も行くことにした。

圭太には申し訳ないけど、私が行くのはライブ目当てではない。ただ単に、”陽兄と一緒にクリスマスを過ごしたい”だけ。ある意味、圭太には感謝します。

ライ…・いや、クリスマス楽しみだな。

学校帰りに、陽兄の高校の校門前で陽兄を待った。
これは学校がある日の田課。

いつも、陽兄と帰る。

「彩！」

聞き覚えのある声に呼ばれた私。

相手は、もちろん

「陽兄！」

私は陽兄のもとへ走った。

「ごめん、待った？授業長引いやつた。」

謝る陽兄。

「許す！」

あーあ、私って陽兄にかなわないなあ。

「陽！」

聞き覚えのない声が聞こえた。

それも、女っぽい声。

遠くから誰かが走つて来る。

私の予想は当たりだ。

まさに、女。

「一緒に帰ろおつ！・・・って誰？このちびっ子。」

この人、陽兄の事好きなのかな？

って言うか、陽兄の事を『氣安く』『陽』って呼ばないでよ。

気持ちが悪い。

「まさか、陽が好きでここにいるの？ー。」

当たつた。

図星だ。

今、私の顔は真っ赤だろ？
ばれたらどうしよう？

嫌われるかも。

「あ、図星だあ。でも、無理ね。こんなガキじや陽に釣り合わない
わよ。」

何この人。

そんな事、私だつて分かり切つてゐるんだよ。
やめてよ。

やだ、私泣きそつ。

「止めるよ、木島。」

誰かが・・・私をかばってくれてる？
誰だろ？

ああ、やつぱりどんな時も助けてくれるんだね。

陽兄は。

「彩の方がよっぽどお前より俺と釣り合つてると思ひナビへやつぱりかっこいい。」

ありがとう、陽兄。

そういう場面、見せつけちゃつて。

私に好きになつて欲しいの・・・?」

つい期待しちゃう。

「なにそれっ! 私の方が陽と釣り合つんだから! こんなガキに釣り合つわけじゃないじゃない? !

もうやだ。

逃げたい。

「行こう。彩」

陽兄は私の手を握つてどつかへ私を連れて走つて行った。

陽兄、私の心読んだ?

私、逃げたいって思つてたんだよ。

なんで、分かつたの?

また、私期待しちゃうよ。

ここは、公園だろつか。

ブランコと滑り台などがある。

「ごめんな、彩」

陽兄がまた謝つた。

「木島の奴うつとおいしいな」

あ、陽兄の愚痴初めて聞いた。

「良いよ、だつて本当の事だもん。」

確かに、木島さんの言つてゐるとは本当だ。

”釣り合わない”

一
よつ

胸が、チクチクするよ。

ニヤ、アハ田シヒトモニニ。

陽兄。

Story? 知ってるよ、そんな事。（後書き）

はい、まだまだ続くよー。(・・・)

From Åo

Story?クリスマス。

12月25日。

ついに来た。

ずっと…ずっと、楽しみにしていたけれど、今はそこまででもない。

昨日の出来事があつたから

でも樂しそうな毛糸。

一応、陽児に可愛いと言われるように努力し、オシャレとがメイクとか張り切つてみた。

陽兒はどう思っててくれるかな?

弓がれたら それはそれでシニ、クがけとね

約束は16時。

今は17時30分。

遅刻したくないもんね。

場所は、よく三人で遊んだ雪雨川。

…よく、ここで水遊びしてたよね。
夏の時も、冬の時も。

それで、圭太が一週間も熱が下がらなくて…

と昔の事を回想してたら…

ふわっ……。

上から何か降ってきた。

白くて、冷たくて、ちょっとふわふわしてると…。
「あっ！…雪だ！」

一人で大声を出してしまい、周りからの視線が痛い。
恥ずかしい、と思って少し橋の下に隠れた。
こんな姿陽兄に見られたらどう思うか…。

ジカンハドンドンスギテコク。

時間は16時過ぎ。

おかしい。

陽兄は絶対に約束を守る人なのに…。
何かあったのだろうか。
ちょっと、嫌な予感がした。

「ヒライヴハウス。

ザワザワザワ…

「おいおい、圭太。」

「何すか？」

「幼馴染みちゃんはまだ来ないのか？」

「はあ…。」

何やつてんだよ、あいつ等…。

おせ…「ピルルルルル！」

? ! 電話 ?

誰だよ、こんな時にやー。

…陽兄の…母ちゃん…から?

「ピルルルルルル！」

なんで陽兄の母ちゃんから電話?

「ピルルルルルル！」

なんか、嫌な予感が。

「ピルルルルルル！」

黒い何かが近くにあるような気がして。

「ピルルルルルル！」

出るのが怖い。

「ピルルルルルル！」

恐れるな、俺。

「ガチャツ」

怖がるな、俺。

『はい…。』

『圭太君？！陽が

『…！…！』

慌てる？明らかに様子がおかしい。

『落ち着いてください、陽兄がなんだって？..』

でも、陽兄の事を伝えてる事は確かだ。

『よ…つ…陽がつ…

『…！…！』

『え…？』

そんなの、

誰が信じると思うか。

i ノ雪雨川

陽兄…遅いよ。

もう、ライヴ終わるよ…？

本当に…嫌な予感があ…たる？

怖い、怖いよ陽兄。

不安で不安で仕方がないよ…。

その時。

誰かが後ろから私の肩を叩いた。

陽…兄？！

「陽兄？！」

しかし、振り向くと。

そこには陽兄の姿はなく、

圭太の姿が？

。

「けつ？！圭太？！なんでここに？！」

「いいか、彩。落ち着いて聞けよ。」

何、なに、ナニ。

やだ、怖い。

圭太が今から私に向かって言う言葉が

「陽兄が、死んだ。」

いつのまにかずつと降つてた雪が、
大粒の雨に変わつていた。

この三の名前のようじ。

Story?クリスマス。（後書き）

まだまだ続くに決まつてんぢやんかっつ！ m m *
そこの君！

：もしかして、気になつていますでしょうか？！
なうんて馬鹿な期待しちやつてすこませんねつ ry ()

From . A o

Story? 誰が信じるもんか。

「陽兄が死んだ？」

私は何回も同じ言葉を繰り返し口にする。
「死んだ…、死んだ…、し…」

「彩！！」

だが、私の瞳には見てはいけないモノが見えてしまった。

それは

圭太の瞳から涙が流れ落ちていた。
涙だ。

圭太が泣いている……？

そんな馬鹿な

これは嘘泣きだ。

圭太、嘘泣き得意だもんね。

「やめろよ、彩!!」圭太では驚かせなしてよ…」

圭太が、私に向かつて怒鳴つた。

「何言ひたやつてるの?圭太、嘘だよね?」

しはぐく沙黙が続いた
ねえ、嘘つて言ってよ。

「俺だって……、信じたくねえんだよ。」

「嘘つけて言つてよ。」

「彩！」

あ
私

現実逃避してゐる。

私は圭太に強く腕を引つ張られタクシーに乗り、どこかへ連れて行かれた。

タクシーから降りると…
そこは、病院だった。

また、腕を引つ張られてどこかへ連れて行かれた。
圭太がいきなり止まつた。

止まつた場所は

靈安室前だつた。

私は、一気に寒気が身体の中に走った。
圭太……、私と同じ状態なのかな？

圭太は恐る恐るゆっくりとドアノブに手を掛けた。
ドアノブを握る手が震えていた。
ドアノブを握る手が震えていた。

そこには、白い布で何かが包まれて いる何かがあつた。

★
○

Story? 誰が信じるもんか。（後書き）（あ書き）

今年もシクヨロだぜいノノ＊
更新遅れてすいませんでした。

From . Ao

Story?頼りないので?

「何？これ…？」

圭太はその白い布に手を掛け、それを捲る。そこにはあつたのは。

「陽兄：？」

何か、疲れた

何か、疲れ果てているような顔をしてるような気がする。

本当に陽兄は死んだんだ。
この時、初めて私は陽兄が死んだ事と受け止めた。
でも、少し疑問があつた。

昨日まで元気だった陽兄が、何故翌日死んだのか。
これは、事故？

「…陽兄は…生まれた時から心臓が弱い

L

え？

今
な
ん
て
?

心臓が弱かつた？

持病を抱えていたの？

元気たこ たじやん

すとすと一緒にたたかわれかるよ
病気とかそんなの。

ずっと…、我慢してたの？

ツラいのに、苦しいのに私たちの前では顔に出せないよう」我慢してたの？

陽兄：陽兄：。

正直に言つてくれればよかつたのに。
私たち、対応したのに。

陽兄にとつて私たちは頼りのない人だと思つてたの……？

Story?頼りないの? (後書き)

更新: 遅れていますm(ーー)m
次回からはなるべくですけど、早めに更新するようになります。
本作の方も終わりましたし、Story()

From: A

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7530z/>

手紙 -ラブレター-

2012年1月8日18時51分発行